

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.370

2016

9

隔月刊



約1年間の留学を終えて帰国した国際教養学科3年次生による留学報告会(同志社女子大学)

特集 大学における障害者差別解消に向けた取り組み

座談会 大学は発達障害をどう受け入れるのか

小特集 大学のIR活動における取り組み

明日への試み 姫路獨協大学

わが大学史の一場面 関東学院大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 京都橘大学/明治大学/早稲田大学

クローズアップ・インタビュー 書道家・美文字トレーナー 杉本健爾さん

日本私立大学連盟



「自由治」碑



岡本清一による著書「自由の問題」
(1959年、岩波新書)





同志社女子大学

Doshisha Women's College of Liberal Arts, Founded in 1876

同志社女子大学は創立140周年を迎えます

本学は、1876（明治9）年10月24日、現在の京都御苑内にあったデイヴィス邸（旧柳原前光邸）において、アメリカ人女性宣教師スタークウェザーと同志社創立者である新島襄の妻・八重によって始められた女子塾を起源としています。

その後、同志社分校女紅場^{じょうこうば}、同志社女学校、同志社女子専門学校を経て、1949（昭和24）年、同志社女子大学となりました。2000（平成12）年以降は、社会の動きや現代女性のニーズの多様化に対応すべく、社会学系、医療系などの新しい学部学科を開設し、現在は6学部11学科、1専攻科、4研究科を擁する女子総合大学へと発展し、京田辺と今出川の2つのキャンパスで約6500名の学生が学んでいます。

新島襄は「女子教育ハ社会ノ母ノ母ナリ」という言葉を残し、社会の発展には女子教育を盛んにすることが不可欠であると考えていました。本学はその志を受け継ぎ、品格と良心を備え、個性を輝かせる女性、そして豊かな世界づくりに寄与する女性を育てていくために、これからも新しい挑戦を続けてまいります。



京田辺キャンパス 友和館



今出川キャンパス ジェームズ館
（国登録有形文化財）

教育活動

高度な専門分野の学びと リベラル・アーツの精神をベースに 幅広い教養を身に付ける



各分野の基礎をしっかり学んで、段階的に専門性を高めていきます。全学科共通の科目や他学科科目の受講、同志社大学、大学コンソーシアム京都などの単位互換制度など、所属する学科の専門科目のほかにも多様な学びの選択肢があり、学生一人一人の個性と意欲を最大限に伸ばすことができます。また、本学では少人数教育を実践し、学生との対話を大切にする教育環境を整えています。学生と教員の距離が近く、同志社女子大学というコミュニティーの中で共に学び成長しあう風土があります。授業では、ディスカッションやグループワークを積極的に取り入れているほか、フィールドワークや地域連携を通して、社会における実践的な学びも大切にしています。

国際理解

一人一人に応える 充実したプログラムで 国際感覚に磨きをかける



本学の教育理念の一つである「国際主義」に基づき、国際感覚豊かな人材を育成する取り組みを行っています。中・長期留学制度としては、英語圏の国やドイツ、アジアの協定大学に留学する制度や、 Semester 語学留学のほか、学生が希望する大学への留学を正規留学として認定する制度もあります。特に、学芸学部国際教養学科の学生は1年間の英語圏大学への留学が義務づけられています。また、海外の短期プログラムには、夏期または春期の休暇期間中に実施する海外研修や日本語指導実習もあり、自分の語学力や目的に応じて参加することができます。留学生受け入れプログラムでは、留学生が学ぶ授業を一般の学生も履修することができ、文化体験などの交流イベントもあります。

課外活動

クラブ活動や多彩な行事、 地域社会での活動を通して 豊かな人間性を育む



学生生活をより充実させるために、学業以外に力を注ぐ活動の場として、47のクラブと3つの同好会があります。また、学生会活動、サマーキャンプやスポーツフェスティバル、EVE (大学祭) などの行事のほか、リトリートやワークキャンプなど、「キリスト教主義」を掲げる本学ならではの行事も多彩です。いずれも学生が実行委員を務め、企画・運営の中心を担っています。これらの活動によって学部・学科、学年を超えた仲間とのつながりができるだけだけでなく、リーダーシップを養う貴重な機会にもなっています。2015 (平成27) 年度にはボランティア活動支援センターを開設し、情報の収集・提供を行うなど、学生のボランティア活動を支援しています。

大学時報

No.370

2016.9



「地の塩、世の光」として

加賀 裕郎 ● 同志社女子大学学長

学校法人同志社が経営する諸学校の一つである同志社女子大学の源流は、1876（明治9）年創立の女子塾にあり、以来、今年で140周年を迎える。「同志社」は「同じ志をもつ者の結社」を意味する。「同じ志」とはキリスト教主義、自由主義（リベラル・アーツ）、国際主義を基盤とした良心教育を通して、よりよい個人、社会、世界づくりに貢献することである。特に同志社の女子教育は、「地の塩、世の光」としてリーダーシップを発揮できる女性の育成を使命としている。

グローバル化の実態

是永 駿 ●立命館アジア太平洋大学学長

1 高等教育のグローバル化

日本社会のグローバル化が喧伝されて久しい。「グローバル」の意味は、使われる分野、文脈で異なる。ふつう「グローバル人材」といえば、企業の海外展開に即応した交渉力、開発力が求められる人材がイメージされるが、「グローバル・ジャスティス」（国際正義）といえば、国際法に基づく法の支配が念頭に浮かぶであろうし、「グローバル・シティズン」は基本的人権などの普遍的な真理を体得して、平和共存を希求する「世界市民」ということになる。言葉が多義化しているのである。高等教育での「グローバル」は、学問は本来世界に向けて開かれ、人類の知恵と想像力が競われる「グローバル」なものであるので、あえて「グローバル」化といわれている

のは、制度上の環境整備、あるいは心的習性（メンタリティー）、つまり意識のありようが問題視されて、喧伝されてきたのだと考えられる。

日本の高等教育では、2000年に立命館アジア太平洋大学（以下、APU）、2004年に秋田国際教養大学が開学、2009年のグローバル30（国際化拠点整備事業——大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業。実際には13大学に選ばれた）を皮切りに、文部科学省によるグローバル化事業が立て続けに打ち出され、2014年のスーパーグローバル大学創成支援事業（採択された大学は2023年までの10年間に各自のプロジェクト構想に基づいた目標達成を求められる）で、一応の区切りがつけられた。当初Aタイプ（トップ型）10校、Bタイプ（牽引型）20校を採択する予定だったが、結果はAタ

イプ13、Bタイプ24、計37大学が採択された。Aタイプに申請したのは16大学と少数であったが、Bタイプには100近くの大学が申請し、激烈な競争となった。APUにとっては大学のアイデンティティーそのものが問われる競争であったが、幸いにも、開学14年の実績が評価され、採択の榮譽に浴することができた。

2 英語環境と日本語環境

現代社会のグローバル化をもたらした大きな要因は、情報技術（IT）革命と世界の言語地図の根本的な変化である。英語が世界の普遍言語として、政治、経済、外交などの国際的な会議や交渉の場面で共通語の役割を担うようになった。アジアの言語地図も、英語圏、準英語圏、非英語圏に分けられる。シンガポール、マレーシア、フィリピン、香港、ミャンマー、ネパールなどは準英語圏であり、日本、中国、韓国、ベトナムなどは非英語圏である。中国、韓国、ベトナムいずれの国も、エリート高校では徹底した英語教育を施している。ヨーロッパの大学も英語によるカリキュラムを実施する大学が増えてお

り、能力のある高校生は欧米の主要大学への進学が可能となった。日本からも、直接海外の大学へ進学する学生が増えつつある。つまり、世界の高等教育が自由市場化しているのである。

APUは、専任教員170余名の半数が外国籍で、24カ国からやってきており、日本人教員を含めて、博士の学位を海外の大学で取得した教員の比率は77%を占める。職員の52%はTOEIC800点以上の英語力を持つ。大学院の授業は全科目英語で行われているが、学部は基本的に日英二言語で行っている。英語のみでの科目もあり、その科目も含めると、学部の講義・ゼミ科目の88%が英語で実施されている。会議文書も日英二言語で用意される。これがAPUの現在の英語環境である。

日本語環境についてはどうか。国内学生、国際学生（留学生）合わせて約6000名の半数を国際学生が占め、80余カ国から来日。卒業後は約60%が日本で就職し、30%が海外あるいは母国で就職し、10%が国内外の大学院に進学する。ほとんどの国際学生は英語基準で入学するので、日本語の学習歴はなく、入学後に習得することになる。入学後の第一セメス

ターは、週12コマ（1コマ95分なので、毎週約20時間）の日本語の授業が必修科目として集中的に配置されている。言語科目とゼミはセメスター制を敷いているが、講義はすべてクォーター制である。

日英二言語制というのは、同じ（あるいはほぼ同じ）コンテンツの授業を日英で実施する、という意味である。一人の教員が日英で行う、日英それぞれ別の教員が実施する、二つの方法がある。ということとは、英語のみで、または日本語のみで卒業に必要な単位を修得できるのでは、と思われるかもしれないが、実際には、日本人学生は英語開講の科目を20単位以上修得しないと卒業できないという縛りが設けられている。国際学生は、就職や日本の大学院への進学などで日本語力が問われる。国際学生が将来、日本で働き、就労人口の一部を形成することを考えれば、日本に立地するグローバル大学は日本語環境も整える必要がある。

3 高等教育の因子と差異化

大学教育は、カリキュラム、教授陣・教授法、学習環境の三つの因子が整えられ、その因子が有効に

機能していることが基本である。三つの因子がトップレベルであり、それらが考え抜かれたシステムのもとに機能的にマネジメントされていけば、そのスポットがトップスポットとなる。APUは九州大分県別府市の小高い丘陵地帯に立地している。首都圏や関西圏からは、中心から遠い僻地という見方をされ、最近は入学者の2割を首都圏出身の学生が占めるとはいえ、日本の受験構造のなかでは優位の立地条件とはいえない。その構造のなかで受験生を獲得する苦労は常につきまとう。しかし、世界で闘う場合には、日本という狭い島国のなかでの中央、地方という意識は背景に退き、そこがトップスポットであれば闘える。海外の会議でAPUを紹介する時には、「日本列島のなかの美しい南の島・九州に立地している」と言うことにしている。事実そのとおりであり、イメージしてもらいやすい。

自由市場化した世界の高等教育のなかで闘うには、国際標準化と差異化が必須の要件となる。カリキュラムの系統履修、科目ナンバリング、多言語多文化対応、双方向授業、成績評価等々、その学問分野における教育の国際標準が指向され、誰が何をど

のように教えるかについてのスタンダードができる。APUは、国際経営学部とアジア太平洋学部の二学部のみ、主に社会科学にフォーカスした大学である。国際経営学部とMBAをユニットにしたビジネススクールの国際認証にチャレンジし、2016年8月にAACSB (Association to Advance Collegiate Schools of Business) の認証を取得した。

ゆくゆくは、こうした分野でアジアトップ30を目指したいと思っている。このような差異化、高品質化へのアプローチは、自由市場化した世界の高等教育界において、他大学に伍して、あるいは一歩抜きんでて優秀な学生を獲得するために、どの大学も取り組んでいる。それを私学の限られた財政基盤のもとで行うのであるから、教職員の能力や行動力を十分に発揮するシステムと、意志決定や指揮命令系統が機能的にかみ合っていること、つまり経営陣のマネジメントが問われることになる。

4 グローバル化のメンタリティー

日本の商社、企業は明治から今日まで世界各地へ限なく出かけて開発し、グローバル化は日常のあり

ふれた光景であったが、それは外へ出ていくということであって、肝心の足元である国内のグローバル化は顧みられてこなかった。ほぼ単一民族、東京一極集中、強力な日本語・日本文化圏などの内的な因子が働いて、なかなか多元、多極、多文化という発想が育たず、IT革命と同時進行した言語地図の根本的な変化にも対応が追いついていない。

高等教育のグローバル化は、制度設計と環境整備、そしてメンタリティー、意識の問題であると述べた。意識の問題を掘り進めると、どういう人材を育てて社会に送り出すのかという教育の中身の問題に行き当たる。大学が育てるべきグローバル・マインドとは何か。一言で言えば、異文化(他者)を理解して受け入れ、共に新しい次元の知恵や価値を生み出す心的習性(メンタリティー)であろう。もちろん、大学は学問の府であるから、人類が求めてきた普遍的真理、すなわち言論の自由などの基本的人権の擁護、国際法を含めた法律の順守などの意識が共有されていることが前提となる。専門性を深めるとともに、グローバル・マインドを持った学生を育てていきたい。